

■新春評論■歌壇の若者たち

若者はすんと佇んで

大野道夫

一 大学短歌会の増加

本稿では主に、高校卒業以上の年齢の若者について考えていくことにしたい。

現在は大学の短歌会が増加しているようで、昨年の四月の段階で全国に三〇弱の大学短歌会が存在しているようだ（浅野大輝「全国短歌会マップ（学生短歌会・超結社編 ver.3.1）二〇一七年四月二日、他」）。北は北海道大学から、南は九州大学、宮崎大学まで、また早稲田大学、京都大学のよ

うに何十年もの歴史がある短歌会や、広島大学のように昨年誕生した短歌会もある。これらの大学短歌会は機関誌を発行しているところが多く、また機関誌以外にも卒業生を含めて同人誌も発行し、文学フリーマーケットなどで販売をしている。また結社との関係は入会していない学生の方が多

二 大学短歌会の作品

これらの大学短歌会の作品はどのようなものだろうか？一括りに書くことはとてもできないが、たとえば昨年の大学対抗の歌合うたあひびである第3回短歌バトルでは、次のような歌を出した岡山大学が優勝した。

題詠「銭」

・銭湯のシャワーを浴びる友人の背中に来るべき結婚式 山田 成海

題詠「日」

・祖父の死を知るよしもなく庭はあり鳩は何度も日を改める 森永 理恵

題詠「流」

・水面に光はすんと佇んで川は流れを止めないでゐる 川上まなみ

山田作の〈友人〉は女性であり、結婚式の背中の開いたドレスを想像させる。森永作は特に下の句が味わい深い。川上作はやはり〈光はすんと佇んで〉がうまい。

三 大学短歌会の評論

私は短歌バトルは生観戦したが、他の大学は内容を詰め過ぎたり、観念的であったりする印象を受けた。岡山大学のような傷のない、オーソドックスな歌がこれからの程度広がりていくかは定かではないが、ひとつの傾向として着目していきたい。

また前述したように大学短歌会は機関誌を発行しており、すぐれた評論も書かれている。ここでは口語歌の読みの問題についての評論をとりあげることにした。

・くもりびのすべてがここにあつまつてくる 鍋つかみ両手に嵌めて待つ

五島 諭『緑の祠』二〇一三年

この歌について、まず小島ゆかりは、「最後は二音字余りで『待つ』を入れている。」と発言していることからして、くもりびの／すべてがここに／あつまつて／くる